

テーマ
4

学びを触発する 大学での教育経験

—高校から大学にかけて
態度変容が見られた学生に着目して—

ベネッセ教育総合研究所 研究員
佐藤 昭宏

テーマ4 学びを触発する大学での教育経験

—高校から大学にかけて態度変容が見られた学生に着目して—

●問題関心

大学志願者数に占める入学者数の比率(「大学収容力」)が初めて9割を超えた平成19年度から早10年が過ぎた。

進学先を選ばなければ、ほぼすべての学生が大学に入学できる大学全入時代において、大学に「進学できてしまった」学生をどうエンカレッジするかは、大学のみならず産業界を含めた社会の共通課題だ。大学もただ「学生の主体性の低さ」を憂い、手をこまねいているわけではない。現状を受け止め、積極的に学生の成長を支援していくための試行錯誤を積み重ねてきている。

ベネッセ教育総合研究所が2016年に実施した「第3回 大学生の学習・生活実態調査」では、2008年に実施した第1回調査と比べ、主体的な参加が必要な教育機会は増加し、授業に真面目に取り組む学生が増えている。一方、学生の学びに向かう姿勢は、より受け身になり、教員・保護者への依存傾向が強まっているという結果が明らかになった。こうした大学教育の現状を、「大学の高校化」といった言葉で不安視する声がある。大人や保護者が過度に学生の変化にアンテナを張り巡らせ、成長支援を試みることで、結果的に学生が自由に悩んだり、試行錯誤をする機会を奪っているのではないかという危惧である。しかし、大学が「教わる場」としての価値を高めようと努力すること自体は、悲観的な面だけではないだろう。ポイントは、教わることで、学生がより深く学べる(あるいは学びたい)状態になっているか、である。では大学でのどのような教育経験が、学生の学びに対する意欲をかき立てるのだろうか。学習意欲は、学習者の心理や環境など様々な要因が相互に作用し合う中で発生するものであり、その因果関係を単純に特定することはできない。しかしより学びに対する意欲が高まるような教育の在り方を確率の問題として捉え、積極的に検討し、「よりよい」教育の在り方を提示していくことに

は一定の意義があるだろう(鹿毛、2013)。本稿では、こうしたスタンスを重視し、以下、分析を進める。具体的には、今回の調査対象である大学生1年生～4年生の中で「高校の授業には興味関心をもてなかったが、大学の授業には興味関心をもっている」学生(進学後に授業への興味関心が上昇した学生)と、「高校の授業には興味関心をもっていたが、大学の授業には興味関心をもっていない」学生(進学後に授業への興味関心が低下した学生)に着目し、大学教育と学びの触発の関係を探っていく。

●高校から大学にかけて、授業に対してポジティブな態度変容をみせた学生はどれくらいいるのか？

そもそも大学進学後、学生の授業に対する興味関心はどのように変化しているのだろうか。そこで、高校時代と大学時代の授業への興味関心に関する変数(「Q.(高校時代)授業への関心・興味をもてなかった」「Q.(現在)授業に関心・興味をもてない」)を使用し、授業に対する興味関心の変化についてタイプ分類を行った。その結果をまとめたものが表4-1である。

この単純なクロス分析の結果だけでも、大学生の学びの実態についていくつかの特徴がうかがえる。まず目につくのは、③の「高校の授業には興味をもてなかったが、大学の授業には興味関心をもっている」学生の比率である。10.8%と全体の約1割に留まっている。大学では、高校と異なり、自らの興味関心に沿って学部や授業を選択する機会は広がるはずだが、このような選択機会が授業への興味関心に与えるポジティブな効果は限定的であるようだ。次に目を引くのは②の「高校の授業には興味関心をもっていたが、大学の授業には興味関心をもっていない」学生の比率である。32.6%と学生の約3人に1人が、大学入学後に授業に対する興味関心を失っている。

表4-1 高校時代・大学時代の授業に対する興味関心の変化のタイプ分類(以下、態度変容のタイプ)

	度数	有効パーセント
①高校でも大学でも授業に興味関心をもっていない	1784	36.1
②高校の授業には興味関心をもっていたが、大学の授業には興味関心をもっていない	1615	32.6
③高校の授業には興味関心をもてなかったが、大学の授業には興味関心をもっている	532	10.8
④高校でも大学でも授業に興味関心をもっている	1017	20.6
合計	4948	100.0

※高校時代の授業への興味関心に対する回答は「該当」、大学時代の授業への興味関心に対する回答は「頻度」で尋ねており、尺度が異なる。

※本テーマが使用する図表中の百分率(%)は、設問に該当する回答者を母数として算出し、小数点第2位を四捨五入した数値を表示している。四捨五入の結果、数値の和が100にならない場合がある。

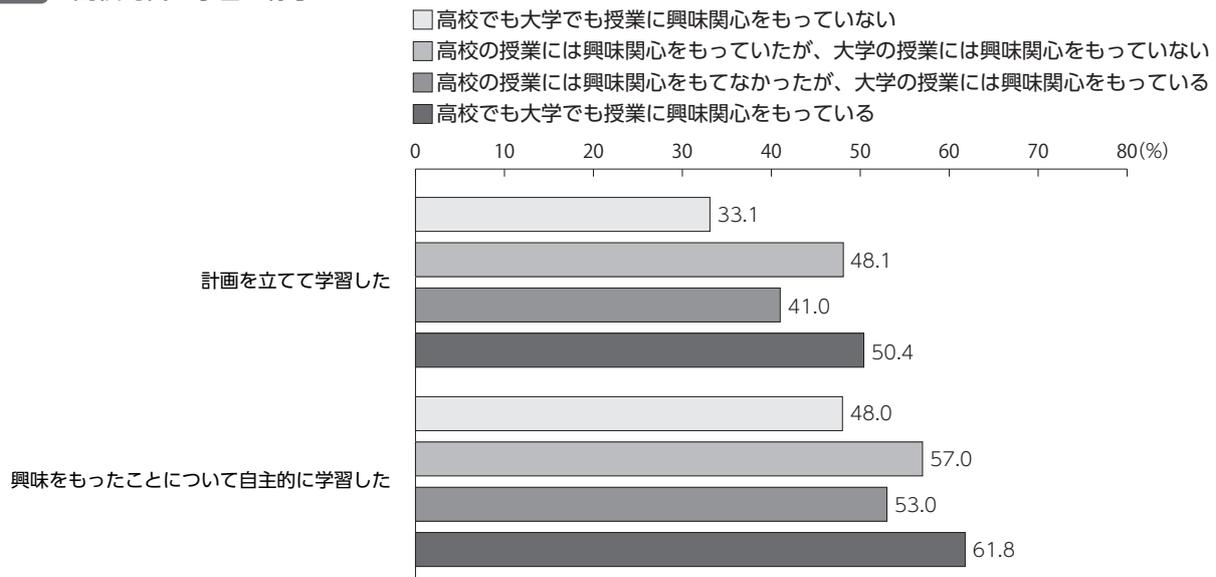
①の「高校でも大学でも授業に興味関心をもっていない」と回答した学生36.1%と合わせると、実に約3人に2人(68.7%)の学生が、「大学の授業に興味関心をもっていない」と回答していることになる。高校と大学では、教育内容はもちろん授業参加の目的や教授方法も変わるため、結果を単純に比較・解釈することはできない。しかし、そうした学校段階の違いを考慮しても、高校と比べ、授業に興味関心がもてない層が増加している結果は、見過ごすことのできない現実である。大学教育関係者だけでなく、大学までの学校段階を含めたすべての教育関

係者が、「子どもたちの将来の学びの姿」として受け止める必要があるだろう。

ではこうした高校から大学にかけての学びに関する態度変容は、学習行動とどのように関係しているのだろうか。態度変容のタイプ別に高校時代・大学時代の学習の様子を確認した結果が、**図4-1**(高校時代の学習の様子)、**図4-2**(大学時代【現在】の学習の様子)である。

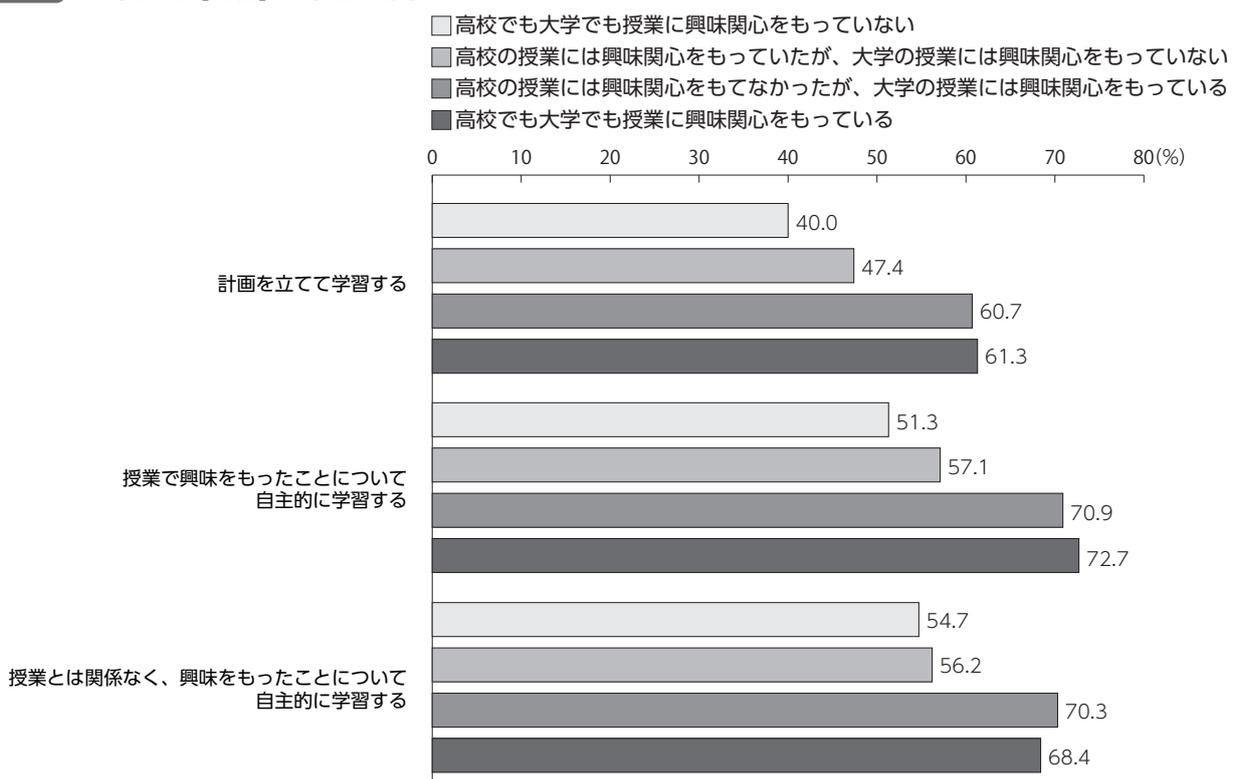
高校時代と大学時代の学習の様子を比較してみると、進学後に授業に対する興味関心を向上させた学生たちは、大学進学後、計画的な学習(高校：計画を立てて学

図4-1 高校時代の学習の様子



※数値は「とても+まあ」あてはまるの%

図4-2 大学時代【現在】の学習の様子



※数値は「とても+まあ」あてはまるの%

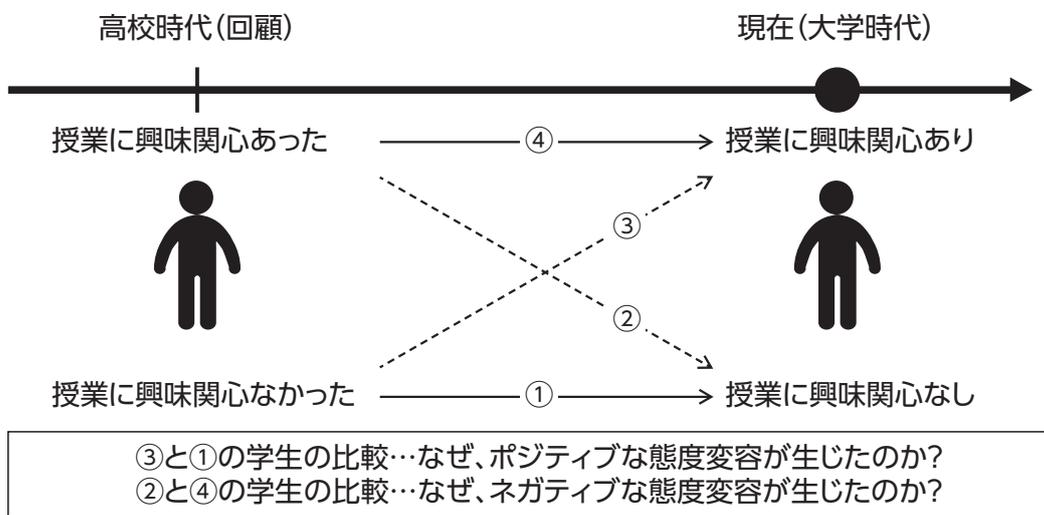
習した41.0%→大学：計画を立てて学習する60.7%)や自主的な学習(高校：興味をもったことについて自主的に学習した53.0%→大学：授業に興味をもったことについて自主的に学習する70.9%、授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に学習する70.3%)の比率が高くなっている。進学後の授業に対する興味関心の変化が、単なる意識の変化ではなく、具体的な学修行動の変化を伴うものであることがうかがえる。ではこうした入学後の「態度変容」は、どのような要因によって引き起こされるのだろうか。この要因をもう少し深く掘り下げてみよう。図4-3は以下で行う分析の全体像を図に表したものである。

まず分析対象であるが、冒頭で述べたように「高校の授業には興味関心をもてなかったが、大学の授業には興味関心をもっている」学生(進学後に授業への興味関心が上昇した学生)と、「高校の授業には興味関心をもっていたが、大学の授業には興味関心をもっていない」学生(進学後に授業への興味関心が低下した学生)の態度変容に焦点をあてる。理由は、前者については「高校でも大学でも授業に興味関心をもっていない」学生の教育

経験と比較することで、後者については、「高校でも大学でも授業に興味関心をもっている」学生の教育経験と比較することで、ポジティブ、ネガティブ双方の態度変容が生じた要因の一端を探ることができると考えたからである。

態度変容が生じる要因には、様々なものが想定されるが、大きく「本人要因」と「環境要因」に区分することができるだろう。例えば進学理由として、学問の魅力や学びを通じた資格取得を挙げているような学生は、学ぶことの意義を自覚しているため、進学後の授業に興味関心を持ちやすいだろう。こうした学生の態度変容は、「本人要因による態度変容」として捉えることができる。一方、環境要因は、どちらかというと教育する側の教育的意図を反映した学習環境によって引き起こされる態度変容である。学習環境には、教育内容や教職員による働きかけ、物理的な施設など幅広い内容が含まれるが、今回は教育内容——特に大学側ではなく学生側が大学教育をどのように認知し、体験したと考えているかという「教育経験」——に着目し、態度変容との関係をみていく。

図4-3 態度変容に関する要因分析の全体像 【①～④は、表4-1の各タイプと対応】



本人要因

- 明確な進学理由の有無が態度変容に与える影響
*進学理由：「興味のある学問分野があること」「取りたい資格や免許が取得できること」

環境要因

- 専門教育が態度変容に与える影響 ……【分析①】
*ある特定の学部系統において態度変容が生じやすい?
- 教育経験の質や量が態度変容に与える影響 ……【分析②】
*経験する教育の内容や量によって態度変容が生じやすい?

●【分析①】学部系統によって
態度変容に差があるのか？

表4-2は、学部系統別に各態度変容の比率を確認したものである。③の「高校の授業には興味関心をもてなかったが、大学の授業には興味関心をもっている」学生の列を見ると、授業に対するポジティブな態度変容をみせた学生の比率は、7.4ポイントから12.4ポイントの幅に留まっており、学部系統による大きな差はみられないことがわかる。

一方、②の「高校の授業には興味関心をもっていたが、大学の授業には興味関心をもっていない」学生の列を見ると、29.9ポイントから38.0ポイントの幅があり、若干ではあるが学部による差がみられる。例えば、教育学部系は38.0ポイントと、全体平均と比べ5.4ポイント高く、授業に対してネガティブな態度変容を見せる学生がやや生じやすいことがわかる。

その他、④の「高校でも大学でも授業に興味関心をもっている」や①の「高校でも大学でも授業に興味関心をもっていない」学生の列でも同様に若干の差はみられた。農水産学部系で「高校でも大学でも授業に興味関心をもっている」の比率が高い(26.8ポイント【平均+6.2】)など、他学部との差が確認できる学部も一部存在するが、全体としては態度変容が生じる傾向に学部系統による大きな差はみられない。以上のことから、学部の違いが学生の態度変容を促す契機になっているわけではないことがわかる。

●【分析②】経験する教育の内容や量によって
態度変容に差があるのか？

次に、教育経験と態度変容の関係をみてみよう。表4-3は態度変容のタイプ別に教育経験の頻度を確認し、さらにポジティブな態度変容をみせた学生がより多く経験した教育(③と①の学生の教育経験の差)と、ネガティブな態度変容をみせた学生がより多く経験した教育(②と④の学生の教育経験の差)をまとめたものである。

まず、ポジティブな態度変容がみられた「高校の授業には興味関心をもてなかったが、大学の授業には興味関心をもっている」学生(③)の列を見ると、教育経験の中では「学期末以外にもレポート・テストが課される授業」(80.6ポイント)、「グループワークなどの協同作業をする授業」(68.2ポイント)などで経験比率が高い。しかし比較対象群である、「高校でも大学でも授業に興味関心をもっていない」学生(①)との教育経験の差を確認すると、「学んでいる内容と将来のかかわりについて考えられる授業」(+11.7ポイント)、「大学での学習方法を学ぶ授業」(+9.9ポイント)、「提出物に教員からのコメントが付されて返却される授業」(+9.4ポイント)、「教室外で体験的な活動や実習を行う授業」(+9.3ポイント)などの項目において差が大きくなっている。こうした教育経験の多さが、高校の授業にあまり興味関心をもてなかった学生の学びを触発する契機になっている可能性がある。

次に、ネガティブな態度変容をみせた「高校の授業には興味関心をもっていたが、大学の授業には興味関心をもっていない」学生(②)の列をみてみよう。教育経験の中で「学期末以外にもレポート・テストが課される授業」(86.2ポイント)や「グループワークなどの協同作業をする授業」(72.3ポイント)の経験比率が高いのは、ポジティブな態度変容をみせた学生と同様である。しかし「高校でも大学でも授業に興味関心をもっている」学生(④)との教育経験の差をみると、「学期末以外にもレポート・テストが課される授業」(+3.6ポイント)で唯一比率が高く、「教員と双方向のやりとりがある授業」(-13.3ポイント)、「学んでいる内容と将来のかかわりについて考えられる授業」(-10.9ポイント)などの項目で比率が低い傾向が確認された。これらの教育経験の差が、大学での学びに対する意欲低下に何らかの影響を与えている可能性がある。

表4-2 学部系統別 態度変容のタイプの分布

(%)

		高校時代、大学時代の授業への興味関心				合計
		①高校でも大学でも授業に興味関心をもっていない	②高校の授業には興味関心をもっていたが、大学の授業には興味関心をもっていない	③高校の授業には興味関心をもてなかったが、大学の授業には興味関心をもっている	④高校でも大学でも授業に興味関心をもっている	
学部系統	人文科学	36.2	31.9	11.8	20.1	100.0
	社会科学	37.5	34.1	10.2	18.1	100.0
	理工	35.5	31.5	11.3	21.7	100.0
	農水産	29.8	35.1	8.3	26.8	100.0
	医・薬・保健	34.3	31.1	10.0	24.6	100.0
	教育	34.1	38.0	7.4	20.5	100.0
	その他 (生活・芸術・総合)	37.3	29.9	12.4	20.3	100.0
全体平均		36.1	32.6	10.8	20.6	100.0

●どのような教育経験が学びに対する態度変容を促すのか？

最後に、大学進学後のポジティブな態度変容とネガティブな態度変容を従属変数とする2項ロジスティック回帰分析を行い、学部系統や教育経験が入学後の態度変容に与える効果を確認する。表4-4は2つの分析に使用した変数、表4-5・表4-6はそれぞれの分析結果である。各分析に使用した変数の記述統計量は注釈に記

載しているのに必要に応じて確認いただきたい。分析モデルに進学理由ダミー（興味のある学問分野があることダミー、取りたい資格や免許が取得できることダミー）や大学の入試難易度、学年、女性ダミー、学部系統ダミーを投入しているのは、これらの変数が態度変容と関連する可能性があるためである。例えば、進学理由「興味のある学問分野があること」「取りたい資格や免許が取得できること」の有無は、大学における教育経験の質や量

表4-3 態度変容のタイプ別 教育経験の頻度

	①高校でも大学でも授業に興味関心をもっていない	②高校の授業には興味関心をもっていたが、大学の授業には興味関心をもっていない	③高校の授業には興味関心をもてなかったが、大学の授業には興味関心をもっている	④高校でも大学でも授業に興味関心をもっている	③と①の学生の教育経験の差 (③-①)	②と④の学生の教育経験の差 (②-④)
サンプル数	1784	1615	532	1017	—	—
ディスカッションの機会を取り入れた授業	63.5	66.1	64.8	69.3	1.3	-3.2
グループワークなどの協同作業をする授業	69.7	72.3	68.2	74.3	-1.5	-2.0
プレゼンテーションの機会を取り入れた授業	65.1	67.7	65.8	69.9	0.7	-2.2
少人数のゼミ・演習形式の授業	62.1	60.2	63.7	63.1	1.6	-2.9
上級生や下級生とやりとりがある授業	27.4	23.3	36.3	30.7	8.9	-7.4
教員と双方向のやりとりがある授業	47.1	47.3	54.9	60.6	7.8	-13.3
提出物に教員からのコメントが付されて返却される授業	46.4	48.1	55.8	58.7	9.4	-10.6
学んだ内容を文章や口頭でふりかえる授業	48.5	49.1	52.3	56.7	3.8	-7.6
学期末以外にもレポート・テストが課される授業	85.1	86.2	80.6	82.6	-4.5	3.6
実験や調査の機会を取り入れた授業	48.0	47.2	55.1	53.9	7.1	-6.7
教室外で体験的な活動や実習を行う授業	39.2	37.8	48.5	45.8	9.3	-8.0
学んでいる内容と将来のかかわりについて考えられる授業	47.9	49.1	59.6	60.0	11.7	-10.9
高校で学習する教科の補習授業	37.7	32.7	36.3	35.9	-1.4	-3.2
大学での学習方法を学ぶ授業	36.9	34.6	46.8	40.6	9.9	-6.0
語学以外の授業で、外国語で行われる授業	37.3	36.2	41.5	36.3	4.2	-0.1

表4-4 分析に使用した変数

従属変数 【ポジティブな態度変容】	高校の授業には興味関心をもてなかったが、大学の授業には興味関心をもっているダミー	「高校の授業には興味関心をもてなかったが、大学の授業には興味関心をもっている」=1、「高校でも大学でも授業に興味関心をもっていない」=0とするダミー変数。
従属変数 【ネガティブな態度変容】	高校の授業には興味関心をもっていたが、大学の授業には興味関心をもっていないダミー	「高校の授業には興味関心をもっていたが、大学の授業には興味関心をもっていない」=1、「高校でも大学でも授業に興味関心をもっている」=0とするダミー変数。
独立変数	教育経験の頻度	授業を通じた教育経験の頻度を尋ねた項目（4件法）を、「よくあった」=4、「ある程度あった」=3、「あまりなかった」=2、「ほとんどなかった」=1に逆転リコード。値が高いほど経験が多いことを表している。
独立変数 (統制変数)	進学理由ダミー	「興味のある学問分野があること」：「該当」=1、「非該当」=0 「取りたい資格や免許が取得できること」：「該当」=1、「非該当」=0の2つのダミー変数を、本人要因による態度変容の効果をコントロールするために投入。
	通学している大学の入試難易度	「おおむね偏差値65以上」=4、「おおむね偏差値55～64」=3、「おおむね偏差値45～54」=2、「おおむね偏差値44以下」=1、に逆転リコード。「わからない」は分析から除外。
	学年	「1年生」=1、「2年生」=2、「3年生」=3、「4年生」=4
	女性ダミー	女性=1、男性=0とするダミー変数。
	学部系統ダミー 【基準カテゴリ：社会科学ダミー】	各学部系統（「人文科学」、「社会科学」、「理工」、「農水産」、「医・薬・保健」、「教育」、「その他【生活・芸術・総合】」）への所属を=1、「それ以外」=0とするダミー変数。一番度数の大きい、社会科学を基準カテゴリとして使用。

テーマ
4
学びを触発する大学での教育経験

にかかわらず、大学での授業に対する興味関心を高める可能性がある。よって、これらの効果をコントロールした上で、教育経験が与える効果を確認する。

表4-5の分析(ポジティブな態度変容の規定要因分析)から明らかになった主な結果は以下の通りである。

- 「学んでいる内容と将来のかかわりについて考えられる授業」の頻度が1ポイント高いと、学びに対するポジティブな態度変容が1.220倍生じやすい傾向がある
- 「上級生や下級生とやりとりがある授業」の頻度が1ポイント高いと、学びに対するポジティブな態度変容が1.160倍生じやすい傾向がある
- 「提出物に教員からコメントが付されて返却される授業」の頻度が1ポイント高いと、学びに対するポジティブな態度変容が1.158倍生じやすい傾向がある
- 「学期末以外にもレポート・テストが課される授業」が1ポイント高いと、学びに対するポジティブな態度変容が0.844倍生じやすい傾向がある
- 「高校で学習する教科の補習授業」が1ポイント高い

と、学びに対するポジティブな態度変容が0.817倍生じやすい傾向がある

- 男性に比べ、女性で学びに対するポジティブな態度変容が0.681倍生じやすい傾向がある

「学期末以外にもレポート・テストが課される授業」以下にみられる1倍より低い倍率は、態度変容の生じにくさを示している。

次にネガティブな態度変容に関する規定要因分析を行った。表4-6の分析(ネガティブな態度変容の規定要因分析)から明らかになった主な結果は以下の通りである。

- 「学期末以外にもレポート・テストが課される授業」が1ポイント高いと、学びに対するネガティブな態度変容が1.182倍生じやすい傾向がある
- 「語学以外の授業で、外国語で行われる授業」が1ポイント高いと、学びに対するネガティブな態度変容が1.083倍生じやすい傾向がある

表4-5 学びに対するポジティブな態度変容の規定要因分析(2項ロジスティック回帰分析)

	B	標準誤差	Exp(B)	有意確率
学んでいる内容と将来のかかわりについて考えられる授業	0.198	0.073	1.220	**
上級生や下級生とやりとりがある授業	0.148	0.066	1.160	*
提出物に教員からのコメントが付されて返却される授業	0.147	0.069	1.158	*
大学での学習方法を学ぶ授業	0.143	0.069	1.153	*
グループワークなどの協同作業をする授業	-0.161	0.095	0.851	+
学期末以外にもレポート・テストが課される授業	-0.169	0.072	0.844	*
高校で学習する教科の補習授業	-0.202	0.069	0.817	**
興味のある学問分野があることダミー	0.004	0.001	1.004	**
女性ダミー	-0.384	0.122	0.681	**
学年	0.14	0.049	1.150	**
定数	-2.151	0.360		
サンプル数: 2,115				
Nagelkerke R2 乗: 0.069				
-2 対数尤度: 2185.994***				

従属変数: 高校の授業には興味関心をもてなかったが、大学の授業には興味関心をもっているダミー

表4-6 学びに対するネガティブな態度変容の規定要因分析(2項ロジスティック回帰分析)

	B	標準誤差	Exp(B)	有意確率
学期末以外にもレポート・テストが課される授業	0.167	0.060	1.182	**
語学以外の授業で、外国語で行われる授業	0.080	0.047	1.083	+
大学での学習方法を学ぶ授業	-0.110	0.055	0.896	*
提出物に教員からのコメントが付されて返却される授業	-0.127	0.056	0.880	*
学んでいる内容と将来のかかわりについて考えられる授業	-0.145	0.059	0.865	*
教員と双方向のやりとりがある授業	-0.264	0.063	0.768	***
興味のある学問分野があることダミー	-0.004	0.001	0.996	***
女性ダミー	0.336	0.095	1.399	***
入試難易度	0.121	0.054	1.129	*
学年	-0.100	0.040	0.905	*
医・薬・保健ダミー	-0.444	0.171	0.641	**
定数	1.404	0.316		
サンプル数: 2,463				
Nagelkerke R2 乗: 0.073				
-2 対数尤度: 3136.117***				

従属変数: 高校の授業には興味関心をもっていたが、大学の授業には興味関心をもっていないダミー

- 「学んでいる内容と将来のかかわりについて考えられる授業」の頻度が1ポイント高いと、学びに対するネガティブな態度変容が0.865倍生じやすい傾向がある
- 「教員と双方向のやりとりがある授業」の頻度が1ポイント高いと、学びに対するネガティブな態度変容が0.768倍生じやすい傾向がある
- 男性に比べ、女性で学びに対するネガティブな態度変容が1.399倍生じやすい傾向がある
- 入試難易度が高い大学ほど、ネガティブな態度変容が1.129倍生じやすい傾向がある
- 社会科学系の学生に比べ、医学・薬学・保健学系の学生はネガティブな態度変容が0.641倍生じやすい傾向がある

ポジティブな態度変容とネガティブな態度変容のいずれの分析でも、入学時点の学問に対する興味関心や性別、学年などの効果がみられるが、それらの効果を統制しても、大学での教育経験が、態度変容に与える効果が統計的に有意な効果として確認された点は興味深い。

●まとめ

ここまで「高校の授業には興味関心をもてなかったが、大学の授業には興味関心をもっている」学生と、「高校の授業には興味関心をもっていたが、大学の授業には興味関心をもっていない」学生の態度変容と教育経験の関係を中心に分析を行い、学びを触発する教育経験を探ってきた。その過程で得られた知見は、特に以下の2点である。

第一に、「学んでいる内容と将来のかかわりについて考えられる授業」や「提出物に教員からコメントが付されて返却される授業」などが学生のポジティブな態度変容に与える効果である。学生が大学で学んでいることと、自分の将来をうまく関連づけながら学んでいるかどうか、課題等に対する教員の評価や反応がきちんと学生に

フィードバックされているかどうか、授業に対するポジティブな態度変容を促すと同時に、ネガティブな態度変容が生じる確率を減減させている可能性がある。学生が現在、あるいはこれから直面していくであろう将来の課題等との関係性の中で、学術の意味や意義をどう提示していけるかが、大学教育を通じた学びに対するポジティブな態度変容を促すためのひとつの鍵といえるのではない。

第二に、「学期末以外にもレポート・テストが課される授業」や「グループワークなどの協同作業をする授業」「高校で学習する教科の補習授業」などが学生の態度変容に与えるネガティブな効果である。大学での学びが上記のような授業を中心に組織される場合、ポジティブな態度変容は生じにくく、ネガティブな態度変容が生じやすい可能性がある。ただ、こうした授業は、大学で学問を学んでいく上で必要な基礎知識やスキルを含んでいることも多い。よって課題の出し方や協同作業の仕方など、教育方法の部分でより一層の工夫や改善が求められている授業群と言える。

近年は大学ごとに学生の学修履歴や成果を積極的に収集、分析するようになってきたこともあり、上記のような分析を大学ごとに行うことは難しいことではなくなってきた。しかし、大学の枠を超えて、学生の授業に関する態度変容の全体的傾向を捉えることのできる大規模データは少なく、この点において、本稿が行った分析には一定の意義があるのではないかと。ただ、今回の分析はあくまで一時点の調査データに基づく結果である。ベネッセ教育総合研究所では、近年、大学との共同研究の中でパネルデータを取得しており、今後はこうしたデータを活用しながら、どのような教育経験が態度変容のきっかけとなるのかを時系列で明らかにしていくことにも挑戦していきたい。

参考文献

- 文部科学省「学校基本調査」
鹿毛雅治 2013「学習意欲の理論 動機づけの教育心理学」金子書房

注1 表4-5の分析に使用した変数の記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
高校の授業には興味関心をもてなかったが、大学の授業には興味関心をもっているダミー	2316	0	1	0.23	0.42
学んでいる内容と将来のかかわりについて考えられる授業	2316	1	4	2.47	0.96
上級生や下級生とやりとりがある授業	2316	1	4	1.96	0.97
提出物に教員からのコメントが付されて返却される授業	2316	1	4	2.41	0.95
大学での学習方法を学ぶ授業	2316	1	4	2.18	0.97
グループワークなどの協同作業をする授業	2316	1	4	2.81	0.85
学期末以外にもレポート・テストが課される授業	2316	1	4	3.19	0.80
高校で学習する教科の補習授業	2316	1	4	2.13	0.97
興味のある学問分野があることダミー	2316	0	1	0.49	0.50
取りたい資格や免許が取得できることダミー	2316	0	1	0.17	0.38
入試難易度	2115	1	4	2.61	0.85
女性ダミー	2316	0	1	0.44	0.50
学年	2316	1	4	2.45	1.13
人文科学ダミー	2316	0	1	0.19	0.40
社会科学ダミー【基準カテゴリ】	2316	0	1	0.32	0.47
理工ダミー	2316	0	1	0.22	0.41
農水産ダミー	2316	0	1	0.03	0.16
医・薬・保健ダミー	2316	0	1	0.10	0.30
教育ダミー	2316	0	1	0.04	0.20
その他ダミー	2316	0	1	0.10	0.30
有効なケースの数(リストごと)	2115				

注2 表4-6の分析に使用した変数の記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
高校の授業には興味関心をもっていたが、大学の授業には興味関心をもっていないダミー	2632	0	1	0.61	0.49
学期末以外にもレポート・テストが課される授業	2632	1	4	3.24	0.80
語学以外の授業で、外国語で行われる授業	2632	1	4	2.06	1.04
大学での学習方法を学ぶ授業	2632	1	4	2.13	0.95
提出物に教員からのコメントが付されて返却される授業	2632	1	4	2.48	0.93
学んでいる内容と将来のかかわりについて考えられる授業	2632	1	4	2.51	0.94
教員と双方向のやりとりがある授業	2632	1	4	2.49	0.87
興味のある学問分野があることダミー	2632	0	1	0.60	0.49
取りたい資格や免許が取得できることダミー	2632	0	1	0.23	0.42
入試難易度	2463	1	4	2.80	0.83
女性ダミー	2632	0	1	0.48	0.50
学年	2632	1	4	2.54	1.11
人文科学ダミー	2632	0	1	0.19	0.39
社会科学ダミー【基準カテゴリ】	2632	0	1	0.31	0.46
理工ダミー	2632	0	1	0.22	0.41
農水産ダミー	2632	0	1	0.04	0.19
医・薬・保健ダミー	2632	0	1	0.11	0.32
教育ダミー	2632	0	1	0.05	0.22
その他ダミー	2632	0	1	0.09	0.28
有効なケースの数(リストごと)	2463				